すみゑ　略歴

八女市稲富
松尾　貞義

私と墨絵の出逢いは、故中島美代子先生の公民館10回コースに入会したのがきっかけです。先生のダイナミックな描き方や筆使いには、唯驚くばかりでした。コース修了後、梅本光男先生指導の「墨友会」誕生となり、9年半程皆さんと楽しいご縁がありました。余白も絵の内で、紙に対しての面積が大切だと力説されました。そして一気に描く事という教えは未だに守れていません。先生が退かれると、八女に墨絵を描く人は多いが、指導される方は美代子先生1人だけでした。もう少し続けてみようと、再び中島教室「みはる会」を紹介して頂いた。生徒は全員秋の文化祭へ出品することになり、平成25年に一般応募に出品しました。28年より現在の師、安達昇先生に来て頂き、勧められて出品した作品が幸いにも入選となった。小生にとって大作主義は苦手なので、この先重圧がずっしりと掛かるであろう。続ける事が出来るのか少し不安である。

秋深く黒の彩なす墨絵展

八女茶で健康　第40回

茶手もみ技術競技の全国大会開催

11月14日八女市立花体育館において全国手もみ茶振興会主催による、第22回全国手もみ茶技術競技大会が開催されました。

福岡県でも毎年4月に八女茶手もみ技術競技会を開催していますが、全国大会の開催は今回が初めてとなります。

この大会の実行委員長は、福岡県八女茶手もみ研究会の大石会長（八女市上陽町）が務められました。

手もみ競技には、北は新潟県、南は鹿児島県から31チーム（3名で1チーム）が出場し、福岡県からも4チーム出場しました。出場者には77才のベテランの方もおられ、俺が一番という意気込みで茶の手もみに汗を流されていました。

使用したお茶の葉は、今年の4月に静岡県で摘採し、蒸気で蒸した茶葉を冷凍保存したものです。競技には5時間を要し、葉振い、軽回転、重回転、揉切り、転繰り、こくり等の作業工程を経て針のように仕上げます。

お茶の審査は、形状・色沢・香気・水色・滋味について行われました。仁田原も審査員の一人として手もみ茶を拝見しました。高度な熟練技（匠の技）により作り出されたお茶は、1本1本がピンと伸びており、素晴らしいものでした。

審査の結果、1位は和束手揉茶技術保存会（京都府）、2位は白川茶手もみ保存会（岐阜県）、3位は埼玉B（埼玉県）、4位は福岡県八女茶手もみ研究会C（福岡県）でした。

福岡の4位入賞チームのメンバーは、徳永慎太郎氏（黒木町）、柴垣智成氏（黒木町）、永松宏章氏（筑後市）でした。

現在、お茶の加工は、コンピュータ制御による機械製茶が主流ですが、技術の基礎として「自分の手」だけで加工する技が重要視されています。

福岡県茶生産組合連合会　事務局長　仁田原　寿一

成長した教え子に出会って　⑩

今夏、義父が胸の痛みを訴え息するのにも苦しそうな様子が続きました。暑さも加わり痩せてきたので、近くのかかりつけ医の診察を受けました。先生はすぐに「紹介状を書くから専門病院に行くように」とのことでした。

検査の結果「肺に水が溜まっていると言われ、即日入院になった」と連絡がありました。

弱音など吐くような義父ではないのに、顔には苦渋の表情が浮かんでいます。

主治医も帰った後で詳しく病状を聞くことはできませんでしたが、ちょうど同室の患者さんの処置に来た看護師さんが3年前の当校の卒業生でした。

目が合うと「あっ、やはり先生のお父さんですか。名前をみてそうかなぁと思ってたんですよ」と笑顔で話しかけてくれました。

おかげで家族として、父の状況や経過などたずねることができ、大まかな処置や経過が分かりました。卒業生が看護師として働く姿をとても頼もしく思いました。聞けば、この病院には何人もの八女看の卒業生が働いているそうです。

その後、管から液がもれてシーツを濡らすようなことがありましたが、夜勤をしていた看護師さんも当校の卒業生で、一緒にシーツ交換を行いました。

学生時代、学内演習や実習で看護技術の指導を行っていたことを懐かしく思い出し、見違えるほど成長し頑張っている姿に感激しました。

残念ながら義父は亡くなりましたが病院で過ごした日々は、義父にとっても、家族にとっても「生きていた最後の思い出」として鮮明に胸奥に刻み込まれました。

今後も患者さんはもとより家族の方々に寄り添い、頼りがいのある看護師として輝いてくれることを期待しています。

八女筑後看護学校 副学校長　高治　智美

12月の道の駅たちばな

道の駅 たちばな　立花町下辺春国道3号線沿　TEL 0943-37-1711

■ひろかわ俳句会

戦時生き新米の香に贅を知る　松延　朝美
秋晴れや部屋いっぱいに日の匂ひ　原口あつ美
プランターを仮のすみかに穴まどい　野中　勝美
かけっこのげんこつ振りて秋の空　一瀬砂智子
質素なる暮らしに萩のうねりかな　山崎　陽子
よちよちの木の実ころころ追ひかけて　柴田　眞理
跳ねている大風呂敷の月うさぎ　結束　節子
二反の田託して届く今年米　酒井　司

■立花俳句会

墳丘へ風ことごとく秋の色　吉泉　守峰
着陸や釣瓶落としに灯が点る　西島志乃芙
一枚の薄き松茸ツアー食　原　宣子
抱っこ帯コスモス園の家族連れ　武田　行夫
北の旅胸に焼きつくななかまど　中村てるよ
刻みては緑の星のオクラかな　深町　和子
敬老に孫は心の祝箸　平田　清香

■立花短歌会

行く春を惜しむがごとき虫の声どこで鳴くのか夕陽かたむく　鶴　邦子
リンリンと虫の合唱聞く夜は日々の暮らしの浄化されゆく　樋口　愛子
来る冬に備えているのかわくらばの下に名知らぬ虫眠りいる　田中たつじ
老夫婦の会話すくなき日常に潤滑油となる孫のおしゃべり　櫻木　敦子
満開の萩の花から唐突に見知らぬ蝶が飛びたって行く　中島　睦美
リンリンと窓辺の草に鈴虫は余命の一夜を鳴き通しおり　井上　精
次々と山里襲う台風にその葉ちぎれてキウイの実垂れる　橋本　泰州
我が裡の獅子身中の虫見えず後の祭りと笑って生きる　松尾ミサキ
耳澄まし夜のしじまに本開き奏でる虫の声を聴くなり　鶴　隆治郎
色初めしほうき草にてキリギリス我家の如く陣取りて鳴く　野中　裕政